

# 「団地再編シンポジウム」の開催

「団地再編」持続的な集住環境へー新たな生活像と風景ー

団地再編 COMPETITION2013 を通して、住宅ストックのあり方を考える

KSDP 関西大学  
戦略的研究基盤  
団地再編  
リーフレット  
Re-DANCHI leaflet-

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業  
『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

FEBRUARY 2015  
VOL. 159



団地再編 COMPETITION2013 展覧会



団地再編 COMPETITION2013 展覧会



団地再編 COMPETITION2013 シンポジウム



団地再編 COMPETITION2013 シンポジウム

## はじめに

団地再編 COMPETITION2013( 関連リーフレット vol.157) の一環として、2014年7月16日と17日の両日、「団地再編 COMPETITION2013 シンポジウム & 展覧会」が大阪市内において開催された(写真:扉)。本リーフレットは、このうち7月16日に開催された「団地再編シンポジウム(主催:KSDP 団地再編プロジェクト、協力:大阪ガス株式会社)」の記録である。

本シンポジウムは、民間企業等および一般市民を対象として開催され、団地再編 COMPETITION2013 の受賞者による講演および、審査員等によるパネルディスカッションを

表1. 発表作品一覧

発表作品	作品タイトル	提案者
最優秀賞	自然と都市が近い奥河内エコ・ライフ拠点	重村力
河内長野市長賞	暮らしの誇りと絆が見える<南花台>!!	三好庸隆
優秀賞	ダンチモリー 2052年、団地が還る未来	塚本文
団地再編プロジェクト案	40m <sup>2</sup> の専用庭のある団地	団地再編プロジェクト

通して、今後の団地のあり方について議論を深めることを目的として実施された。民間企業44名、行政19名、大学7名、一般市民6名、NPO等5名の計81名の参加があった。

団地再編 COMPETITION2013 受賞作品と団地再編プロジェクトによる再編案が、それぞれ代表者によって講演され(表1)、それを受けてコンペ審査員等(表2)によるパネルディスカッションが実施された。パ

表2. ファシリテーター、パネリスト

氏名	所属
角野幸博	関西学院大学
飯田善彦	(株)飯田善彦建築工房
安原秀	OLAの会
星田逸郎	(株)星田逸郎空間都市研究所
忽那裕樹	(株)E-DESIGN
重村力	神奈川大学
三好庸隆	武庫川女子大学

ネルディスカッションでは、UR南花台団地をはじめとする公的集合住宅団地の今後の可能性やあり方について活発な議論がなされた。

## 1. コンペ受賞者他による講演

### 1-1. 自然と都市が近い 奥河内 エコ・ライフ拠点 (発表: 重村力 写真 1)

河内長野市には豊かな自然環境があり、趣味豊かなライフスタイルが育ちつつある。私たちは、より多様な家族が、定住する仕組みを作りながら、様々に活動する団地をここに作るべきだと考えた。また団地というのは生活提案を伴って作られてきたものであり、現代の生活提案も団地の再生から行うべきというのが私たちの提案である。

南花台では 25% の住戸が空き家であり、40% の駐車場が空いている。これらの団地の資源をどう豊かに転換するかが課題である。

そこで現状の空地を活用することを提案する。団地の外部空間は街路型の空間に変えるべきである。また団地によって途切れている街路沿いの良好な商住空間は連続させるべきである。そうすることでセンター地区は、よりまちの中心になるだろう。

空地にそれぞれ特徴を持たせ、特徴に応じた空間と施設づくりをすることで、そこに人が集まる。例えば畑とすることで、住民だけでなく、周辺からも人が集まり、食文化や交流市場などもできる。

最上階、妻側、接地階などの住戸は豊かになる資源であり、これらに投資し様々な住戸を作るとよい。現代はペットの時代である。ペットが飼える団地、住戸が求められる。

南花台では、周辺の戸建て住宅から高齢者が賃貸住宅に移る実態がある。バリアフリー化した住棟を作り、高齢者に入居してもらう。グループホームやデイケア施設の導入も考えられる。また子育て支援に特化した場所をつくると内外から親子が集まるであろう。

一方、中央の道路沿いにある築山は、もっと利用の増加を図るべきである。手作り工房や、菜園レストランなどを点在させるとよい。通りに賑わいの連続性があると、ストーリー



写真 1. 発表者: 重村力

トウォッチャーがいて、安心感のある空間にもなる。

さらにセンター地区には中心となる広場が必要である。ショッピングセンターにマーケット広場をつくり、様々な活動空間とする。広場周辺には、活動にふさわしい施設ができるであろう。

昭和 30 年代に、今の団地スタイルが登場したが、それとは異なる生活スタイルを提案することによって団地を再生する。その第一号が南花台になってはどうかというのが私たちの提案である。

### 1-2. 暮らしの誇りと絆が見える<南花台>!! (発表: 三好庸隆 写真 2)

私は、団地再生はそれだけを見るのではなく、生活圏の再生としてとらえるべきだと考えている。南花台の生活圏の再編はどうしたらよいか私の提案である。

河内長野市の人口は 12 万人弱、大阪府南部に位置している。消滅可能性自治体として大阪府下で第一位といわれている。

南花台のどこに焦点を絞るかが課題だったが、周辺戸建て住宅、UR 団地、相互に特性を生かしながら生活圏の再生をする必要があると考え、より広い範囲で答えを見つけていった。本提案では、生活圏、ライフスタイルのイメージを「暮らしの誇りと絆が見える南花台—奥河内スタイル満喫の近郊外生活—」とした。奥河内スタイルとは、河内長野市が推進する、自然豊かな環境を生かした暮らしや子育てを目指す生活スタイルである。

私は提案の骨子として、以下のコ



写真 2. 発表者: 三好庸隆

ンセプトを提案した。

①南花台の UR 団地を地区全体のコモンスペース、広場とする。空間を再編し、魅力付けを行う。中には菜園、花壇、緑地を配置する。集会所にそれぞれ個性を持たせ、図書館やギャラリーとして集客を図る。

②地区センターは、周辺を含め拡大南花台センターと位置付け、魅力あるものにする。人口減少も考慮し、UR 団地の一部を除去して他の施設を入れ借地料を取る。

③センターに暮らし再編のシンボル施設を入れる。たとえば有料老人ホームを導入し、広場も入れる。運営において地域に向けた様々な工夫をする。例えば戸建て住宅向けのデリバリーサービスや、訪問介護、配食サービスなどを展開する。

④住棟のリフォームを行い、エレベーターも導入する。低層階はサービス付高齢者住宅などのシニア向けとし、高層階は若者向けリフォームをする。

⑤様々な提案をバランスよく作っていく必要があるが、住民が住民目線で決めていく仕組み、住民が主体的に発想したかのような気持ちを持ってもらう仕組みが必要である。たとえば、2020 年のオリンピックに合わせて 2020 年の南花台フォーラムを企画し、世代別のフォーラムを開催したり、世代間での意見の共有を図るなどである。さまざまなアイデアを議論する場を作り、みんなで行動するマネージメント組織を作る。住民+UR によって展開することで、ソーシャルビジネスの導入、参加、参入も期待できる。



### 1-3. 「ダンチモリ – 2052年、団地 が還る未来–」

南花台の課題として、現状のライフスタイルに合っていないことが挙げられる。具体的には生活の多様性に対応していないこと、屋内、屋外とも専用共用が分断されていて住民同士の交流が妨げられていること、屋外空間には余裕があるが、単調で生物の多様性に乏しいことである。今後も居住者が減少して、維持管理が困難になり、また市の税収も減少することが予想される。

南花台の地形を手掛かりにして再編の方向性をみると、台地を切り開いたことで植生の連続性が分断されており、自然から離れた生活をしている。そこで以下の3つの「モリ」を提案する。

居住者による主体的な団地運営の仕組みを創る「守」、共有空間の再編によって多様な活動の場を創出する「森」、住む以外の機能を導入し、住の充実を図る「盛」である。

「守」においては、団地に住み、団地で働く団地レンジャーを創出する。団地レンジャーは住棟や住戸を借り上げ、カフェ等を企画、運営し活動費を捻出、維持管理コストの低減を図る。また住民の暮らしに能動的にかかわり、住民相互のコミュニケーションや活動をサポートし、助け合いが循環する仕組みをつくる。

「森」においては、共用部にケアハウスなどを導入し、半専用、半公共空間として開放、商業施設の導入も図る。建築と屋外の一体化や、住民が利用できる屋外空間の拡大を図る。さらに周辺の自然環境との一体化も目指す。

「盛」においては、住棟内にマーケット、ケアハウス、カフェなど住以外の機能を導入し、住の充実を図る。団地の暮らしを豊かにし、暮らしを継続し、また異なる機能同士が触発しあって、新たな活動を生み出すことが考えられる。



写真3. ファシリテーター：角野幸博

### 1-4. 40m<sup>2</sup>の専用庭のある団地(発表： 芦田康太郎)

団地再編プロジェクトでは、40m<sup>2</sup>の専用庭がある団地を提案する。南花台は都心までの交通の便がよく、豊かな自然環境が周辺にある。敷地内には緑地、駐車場などの屋外スペースがある。都心では得られない豊かな自然のある健康的な郊外居住を行うライフスタイルを提案した。

屋外スペースを専用庭として、一戸当たり約40m<sup>2</sup>を分配する。住戸内の生活が屋外に拡張され、耕作、バーベキュー、キャンプなど交流の場となり、多様な生活風景を作り出す。また住民による自主管理が実現することで、団地から持続可能なまちへと転換する。

公道を敷地内に通し、住棟を接道させ、将来の住棟ごとの改修を可能にし、一団地を普通のまちのスケールに近づける。緑道を東西に通し、周辺住民に開放された空間とする。敷地の一部は売却し、店舗や併用住宅、戸建て住宅を導入し、街並みの連続性を確保する。得られた資金は住戸、住棟の改修整備に充てる。

住棟の一階を改修し、集会施設やカフェ、高齢者施設など、まちの機能を敷地内の公道沿いに配置する。また住棟間にはデッキ等を付け、住棟間のつながりを作る。住戸では住民自らが改修することができる仕組みをつくる。

一つの暮らし方を提示するのではなく、専用庭があることで、多様な風景と南花台ならではの暮らしを作ることが私たちの提案である。



写真4. パネリスト：飯田善彦

### 2. パネルディスカッション

ファシリテーター角野幸博(写真3)

今回のコンペの背景として、まず南花台の状況として、人口減少、高齢化の進行といった大阪府南部の状況を踏まえた提案が求められた。またコンペでは団地とは何だったかという問いかけをしていて、高度成長期に流入してきた住民に良好な住宅供給するというミッションは変わったのか、今後求められるミッションは何かを示すことが求められた。

この背景を踏まえ、再生のテーマとは何か、暮らしのテーマは何か、への提案が審査のポイントであった。

具体的提案では、地域・広域的な提案、敷地レベルの提案、個々の住棟、住戸レベルの提案、マネジメントの提案があった。

今後考えるべきことは、これらの提案を、どのように実現させるかである。制度、事業手法、資金調達、事業実施体制、広報・イメージ戦略を考えていく必要がある。

パネラーの方々にはコンペについて意見をいただき、また受賞者からの意見もいただいて議論したい。

パネリスト：飯田善彦(写真4)

南花台は、戸建て住宅地が中央の道路に沿って連続していることが特徴である。戸建て住宅を含めた南花台全体をどう考えるかが重要なポイントだったと思う。

重村案、三好案とも中央の道路に都市サービス施設を付け加える、住民のための施設を加えるという提案であり、地域の問題としてとらえた2人の案は高く評価できると思う。

提案のポイントは、一つは南花台



写真5. パネリスト:星田逸郎氏

の特性をいかに見出して、新しい団地の質に投影していくか、というところ、もう一つは全国共通の問題に対して、共通解を提案することであったと思う。

50年前の団地には、当時の家族像が投影されているが、今はその家族自体が成立していない。新しい家族像への対応がテーマである。多様な生活像に対して団地がどう対応するのか、不自由なハードウェアをどう変えていくかが課題である。

さらに、必要とされる都市サービスも変化している。高齢者の増加に対してサービスを充足させる仕組みがあるか、さらに河内長野市の豊かな自然をどう取り込んでいくのかも重要であろう。

マネジメントを住民主体とする案は多かったが、どうするかが難しい。しかし住民の年齢分布から見ると案外できるのではないかと私は思う。自主管理という考え方が重要であろう。

これらを評価基準として評価したが、どう実現していくかが今後の重要なテーマである。

パネリスト:星田逸郎(写真5)

このコンペでは予めテーマが与えられていない事に意味があると感じ、私は実務者の立場から見させて貰った。団地再生の手法は既にかなり出ている中でその実現の手立てこそがいま課題である。

再生方策の実現に向けて社会をどう説得するのかという点にも注目した。団地再生にとって空間構造は多少どうでもいい問題なのか、ふさわしいものに改修すべきなのか。私は



写真6. パネリスト:安原秀氏

空間構造が良好に修復されることが団地の長期的持続性にとって重要であるという考えを持っている。さまざまなインターフェースが暮らしと空間と結びつけたり、空間構造によって創出されるものがライフスタイルを支えていることが重要だと考えている。

一般に、現場ではコスト・制度・民意によって可能性が制限され、アグレッシブな空間構造の再編は困難な傾向があるが、希望と夢を持ってチャレンジしていきたい。

パネリスト:安原秀(写真6)

コンペに関して気になっていたのは、提案者がどういう時代認識をしているかということである。文明は成長期と定常期を繰り返して進化してきたが、2000年を大きな変換点として成長はピークに達して定常期に向かう、私はこれからの日本社会には上昇の大きな変化ではなくて少し下がったところでの、成熟期を迎えていると考えている。

南花台団地に代表される開発は地形的に下流から上流へ向けての開発であり、最上流は戸建て住宅地になって、森とのフリンジで止まっている。写真で見ると良く分かるが南花台には団地であることの必然性が感じられない。大量の住宅を作るという当時の社会的要求で無理をして拙速でつくられてきたのではないかと。

以後住みやすくするべく工夫し、努力が繰り返されてきたが、40～50年を経て低成長時代を迎え、矛盾が露呈してきたのが現在であろう。

一方、周辺の森林、自然には大きなポテンシャルがある。数十年間の



写真7. パネリスト:忽那裕樹氏

都市化と風土が一体となった抜本的な蘇生が求められている。

だから南花台だけではなく、周辺も含め地域全体が新しい時代に向かっていく提案が求められる。

重村案は都市的に洗練された考えの下にエコライフを導入しようという案である。ダンチモリは、生産という考え方をより重視した暮らしを導入しようという案で、具体的にどうするかはこれからの話だが、都市の支配から独立した周縁地域の生活の提案であった。

いずれも地域全体を一つのエリアとして関連をもった生活圏を組み立て直す発想が必要であるとしており、今後は、これらをどんな方法で、誰がやるかの議論が重要となる。

パネリスト:忽那裕樹(写真7)

本コンペは賞金なし、実現性なしのコンペではあったが、これを機にURや河内長野市がどうアイデアを実現させるかの議論の端緒になればよい。実現させる手段を考えていくことが重要である。

審査にあたり重視したのはランドスケープの視点と、少し変な提案に意味があるという点である。

ランドスケープから見ると、ダンチモリ案は周辺の水環境など、これまで無視されてきたところを取り戻す案だと思う。地形をもう一度読み直すという視点を入れてきたことは評価できる。また一方で、戸建て住宅や、商業地域を入れるなど、地域レベルの提案も私は高く評価した。

変な案については、クラフトマンという家具とかを作っている人がそこにずっといるとか、地域材を使っ



ている職人がいて地元の人とつながっているとか、おもしろかった。

階段室を公共の場にするとか、一階全部を施設にするとか、空室をホテルにするとかは、住宅以外の問題を解決するという点から面白い案であった。

空地をどうするかについて、多くの人が提案しているのは良かった。また100年後の遺跡とする案もいい意味で示唆に富んでいると感じた。

その場所で何ができるかをまず考えて、つくるもの、支えるものは後から考えるという方法論からすると、畑にするなどの提案は、より実現性を高めることが求められる。どの案も住民が実施し、住民が責任を負う形になっている。これは管理の仕組みを変えることであり、その仕組みをどう作るかが課題である。責任を持つ住民づくりが、実現に向けて必要であろう。

パネリスト：重村力

このコンペにおいては、何が団地の財産となるかを考えた。団地の財産には①集まって住む形態、②豊かなオープンスペース、③戦後のビルディングタイプがあるが、これらの良いところを活かすことが案外提案されていない。

公共的に管理された空間に集まって住むことは、乱世に生きるに等しく、多摩平団地の再開発でも、住み手ががんばって改善してきた経緯があった。

戦後のビルディングについてみると、歴史的にはそれ以前の同潤会アパートなどは街路型であったが、戦後はソビエトの影響か、そうではなくなっている。ドイツには今でも街路型が残っていて、住棟と街路との関係があるが、UR型はつながりが無い。これをつなげるだけで効果がある。これは住棟の改造で対応できる。

ヒューマンインタフェースを持った改造により、街路との関係を再度作ることで、緑地もよくなり、そこ

に集まって住むパワーを発揮できれば、地域もよくなる。もっと実践を重ねる必要があるが、こういう突飛なことをするのは大阪であり、大阪では南花台だと思う。

パネリスト：三好庸隆

私は団地再生とは暮らしの再生であると言っているが、人体のアナロジーでみると、都市においては、部分部分でものをいう西洋医学に限界が来ていて、総括的、東洋医学的に問題を解く必要がある。

また人口が減少し、総需要が減ることは大きな問題である。企業、エンドユーザーは、需要が減っていることで、条件の良いところに流れてしまう。南花台で何ができるかを考えていく必要がある。

生活圏の再生は東洋医学的に総合的に考えていく必要がある。総合的とは、もっと福祉の人や違うアイデアを持っている人とか、いろいろな立場の人たちの知恵を集めていく必要があるということだ。

今日、設計者、企画者だけで考えていくには、どこかに限界がある。団地再生に向けて、設計者に何が可能かという視点で考え、他分野の人が見たときにこれは良いと思ってもらうところに真の価値があると思う。

ファシリテーター：角野幸博

ありがとうございました。それでは、皆様のご意見を踏まえ、次はどうやって実現するかについて話を進めたいと思います。

パネリスト：飯田善彦

南花台を近畿圏の郊外とみるか、河内長野の中心とみるかで大きく違ってくる。都市居住とは異なるものにするのか、一方で周辺の自然が入り込んでくるような都市化を進めるという方向もある。

いろいろな機能を集約する、中心の道の両側に住宅や施設が入る、そういう方向性が必要である。都市とは違うものを目指す時には、既存のオープンスペースが新しい高密度な

住棟の都市活動をサポートする仕組みが必要である。

私は人口減少の中で、いかに生活を安定させるかを考えるときには、森に戻す方向が良いと思う。ローカリティを追求した団地の姿を考えた方がリアリティがあると思う。

パネリスト：星田逸朗

住民の意思の真のリアリティや所在が重要だと思う。作り手の思いと住まい手の思いが合っているのか、ギャップをどう埋めていくか。

新築がベターであり、古いものに住み続けるのは良くないという価値観がまだ趨勢で、リノベーションのイメージが一般に浸透していない。

団地のスケール感や環境の快適さ等、優れた資質や可能性を一般の人にどう知ってもらうかが課題である。

現場の立場からは、良質なチャレンジを続けていくしかない。大胆な躯体改修は住棟単位の効率で考えると大変である。しかし躯体の改変は景観やまちづくりに寄与し公益性が高いはずであり、躯体改修には公共の資金を入れてはどうか。躯体以降のインフィルは独自採算で行うといった方法も考えられる。都市や社会への補助の配分を変えることで、色々可能になるのではないか。価値観を再編していくことが住環境の未来にとって有効であることを証明する必要がある。

パネリスト：安原秀

どうするかについて一般論にしてしまうと解決は難しい。まず危機感を持つことだろうが、企業、UR、行政、住民とそれぞれに危機感を持っているはずだが漠然としている。

よくなりたいと思うことについても同様で、特に住民にはこころみの事例などが伝わっていない。行政から情報は出ているが、行政言葉で語られたものなどは住民の心に響いておらず、つまりは造る側も命がけないし、見る側も感じようという思いで受け取っていない繰り返しだった。

高齢者は体力が低下していく中、今を大事にしたいと思っている。そして元気な高齢者と若者の自由な考え方は似ている場合が多い。両者に向けて専門家が本当に琴線に触れる情報を出していく必要がある。

物事を決めるときに地域の世話役や役員がまず登場する今までの習慣をあらためて、地域の誰もが自分の問題と受け取る仕組みをつくりたい。

そして専門家に対して、こんなことは出来ないだろうか？という問いかけをすれば、答えではなく選択できるメニューがすぐに出てくるような環境を作ることが実現の入り口だと思う。

パネリスト：忽那裕樹

物を作っていくところについてみると、現状では、プロポーザルがあって、基本構想、実施設計、コミュニティづくりとか、それぞれが分断されている。一貫して任されるという仕組みがあるとよい。また若い人たちにそういう働き方、暮らし方が提供できたら良い。発注のしぐみに多様性を持たせるとよい。

責任ある住民づくりという点では、きっちりした情報を出して、信じて付き合う必要がある。信頼する、責任を取るという仕組みを目に見える形でつくる必要がある。

外部専門家の役割は、より開かれた環境では情報を共有し、意思決定を透明化すること、その意思決定を応援する仕組みを作ることである。そしてそこにがんばったらお金がつくという仕組みがあるとか、企業との出会いの場があるとよい。

特徴ある生活やテーマ性、地域性への責任、ビジネスへの展開、様々

な主体が入ることを可能にする仕組みが、実現に向けて必要である。

パネリスト：重村力

南花台は若い団地であり、元気で子供もいるし、絶望的な場所ではない。若い人は家賃補助で入ってきて、持ち家を売って転居してくる高齢者もいる。しかし、25%が空き家となっている。高齢者にとっては住戸のアクセスが悪く出ていく、年金生活者にとっては家賃が安くない、若い人が家を買うタイミングで出ていく、都心から30～40分にしては案外高い家賃で、もっと広めの家が他の場所では購入できる。

河内長野では、深い自然の中で都市居住が可能というところを発展させていくことがよい。南花台がその拠点になればよい。情報拠点広場があり、奥河内のライフスタイルが凝縮している拠点である。UR、河内長野市、住民、それぞれ win-win-win の関係を探し出そうではありませんか。

パネリスト：三好庸隆

実現性について、アナロジーでいうと、生活圏に変化をもたらすには団地にエネルギーを与える必要がある。一つは内部でエネルギーを生み出す、活性化させる、住民同士のコミュニティ活動である。もう一つは外部からのエネルギーを導入することで、何らかのビジネスや若い人の活動がこれにあたる。この二つで強化していく必要がある。

また危機感を共有することが必要である。生活者にはそういう機会が無い。課題を共有し、危機や課題の構造をよく理解する、共有する。それに対して専門家が再生のアイディ

アを出す。そういったことが必要である。

さらに投資と回収の仕組みを考える必要がある。これがないと外部からのエネルギーが来ない。またステークホルダーとして、住民、市、URがあり、またセンター地区の強化においては民間企業も入る。これらの役割分担と協調が重要である。

ファシリテーター：角野幸博

以上の議論をまとめると以下の通りだと思います。

①ドイツの世界遺産の団地のように、日本の団地にもデザイン、暮らしがあり、建築の魅力、暮らしの魅力があることの情報発信や、魅力を次世代に伝えていく仕組みが必要である。

②スペースストラクチャが変わらない中で家族やライフスタイルの変化に対して、変えていくところ、可変性を持たせるところの両方を、仕組みとして持つ必要がある。

③住民の役割、ステークホルダーの役割を理解しあうこと、高齢化による住民の弱体化を支える組織、企業、NPOが必要である。さらに責任を果たすことを支える仕組みが必要である。パネリストの皆さん、有難うございました。

### 3. おわりに

江川直樹

今後、コンペで提案されたことを一つ一つ実現できればよいと考えている。その時は重厚長大型の事業ではなく、小さな仕事が多発的にすることで展開できればよいと思う。事業主体であるUR、行政の方とも、そうした進め方について一緒に考えていきたい。

(文中敬称略)

#### 『団地再編シンポジウムの開催

—団地再編コンペティション2013より—

作成：団地再編プロジェクト室

とりまとめ：保持尚志（関西大学大学院 博士後期課程）

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅「団地」の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

#### 関西大学

先端科学技術推進機構 地域再生センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

先端科学技術推進機 4F 団地再編プロジェクト室

Tel : 06-6368-1111 (内線:6720)

URL : <http://ksdp.jimdo.com/>